



NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

= 財団法人 国際湖沼環境委員会 =

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

ヨルゲンセン委員長 「第1回プリゴージン賞」を受賞

ILEC科学委員会の委員長で、スウェーデン王立薬科大学教授の、スベン・エリック・ヨルゲンセン博士が、このたび栄えある「第1回プリゴージン賞」を受賞されました。この賞は、1977年にノーベル化学賞を受賞し、昨年5月に亡くなった、ロシア生まれのベルギー人物理化学者である、イリヤ・プリゴージン氏の業績を称えて、シエナ大学と、イギリスのサウサンプトンにあるウェセックス研究所が、共同で創設した賞です。この「プリゴージン賞」は、熱力学分野の発展に貢献した研究者に贈られる賞です。本賞の受賞者には、賞金10,000ユーロと、金のメダルが贈呈されます。栄えある第1回授賞式は、6月16日に行なわれます。

イリヤ・プリゴージン氏は、1917年にロシアに生まれ、非平衡熱力学、特に散逸構造理論への貢献により、1977年にノーベル化学賞を受賞されました。

ヨルゲンセン博士の受賞理由は、熱力学を生態系に応用することによって、熱力学の発展に貢献したことによるものです。ヨルゲンセン博士は、生態系の反応と進化について、より深く理解するために、熱力学的なエクセ



ルギーの概念を広く用いました。すなわち、目標機能としてエクセルギーを生態系モデルに導入することによって、「構造的に動的なモデル」と名付けられた、新しく生み出された「生態学/環境モデル」を発展させたことによるものです。

平衡熱力学、非平衡熱力学、散逸構造理論、エクセルギーなど、とても専門的で、ニュースレターの紙面上ではご紹介できませんので、興味をお持ちの方は、関連する書籍をお読み下さるようお願いいたします。

今号の トピック

ヨルゲンセン委員長「第1回プリゴージン賞」を受賞
湖沼流域管理イニシャティブ - ナイロビ・ワークショップが開催される
湖沼流域管理イニシャティブが最終段階に：
ワーキンググループ会議の進捗状況
湖沼に関するフィリピン初の国際会議が開催される

シャンブレン湖流域プログラム：行動に向けた機会
故ウイリアムズ博士の遺稿「宇宙船地球号」
第14回湖沼水質保全コース研修始まる
第58回理事会及び第51回評議員会報告
世界湖沼ビジョン・エグゼクティブサマリー
ハンガリー語版が完成

湖沼流域管理イニシャティブ-ナイロビ・ワークショップが開催される

地球環境ファシリティー（GEF）からの資金により、ILECが推進している「湖沼流域管理イニシャティブ」プロジェクトの“地域の経験とそこから得られた教訓”に関するアフリカワークショップが、ケニアのナイロビで、昨年11月3日から6日までの4日間にわたって開催されました。「湖沼流域管理イニシャティブ」には、USAID、世界銀行オランダ水パートナーシッププログラム（BNWPP）、滋賀県、ILECからも協調資金を提供しています。この事業の究極の目的は、地域レベル、州省レベル、国レベル、国際レベルにおける湖沼・貯水池流域管理の改善策を目指して、関係者の能力強化を図ろうとするものです。この目的を達成するために、このプロジェクトは、GEFが過去に取り扱った14湖沼と、それ以外の14湖沼の中からいくつかの湖沼を選択し、それらのプロジェクトにおいて達成・実行された教訓について評価し引用するように組み立てられています。

今回のナイロビ・ワークショップは、汎アフリカSTART事務局（PASS）の主催によるものでした。このPASSは、国際科学会議（ICSU）の後援の下に組織された、地域的な科学的な能力強化のためのネットワークであり、とりわけ地球的な環境の変化が及ぼす水資源、食糧生産、健康への地域的な影響について、共同研究を実施するための組織です。PASSは、ナイロビ大学のチロモ（Chiromo）キャンパスにあります。

ワorkshopでは、アフリカの8つの湖沼について発表がありました。すなわちバリンゴ湖、チャド湖、マラウイ（ニアサ）湖、タンガニカ湖、ヴィクトリア湖（以上GEF湖沼）、ナイバシャ湖、ナクル湖、それにカリバ湖（以上非GEF湖沼）の8湖沼です。また、今回のワークショップでは、このプロジェクトの対象とされていなかったジョージ湖についても発表がありました。ワークショップの目的は、得られた教訓の交換と経験の共有を促進することと同様に、これら8つの湖沼

での流域管理問題に関して、専門家と関係者から、関連する情報を収集することでした。ワークショップには、20ヶ国以上から100人を超える専門家と関係者が出席し、活発かつ熱心な議論を展開しました。

総合的な水資源管理を通じて経済発展過程の主流となるよう、ワークショップでは、湖沼と貯水池の保全と管理の必要性に重点が置かれました。流域に住む多くの人々、急速な人口増加、都市化、工業化、鉱業の発展、灌漑農業の拡大、気候変動の影響といった、湖沼と貯水池に対する直接的・間接的な強い圧力に抗するには、湖沼流域資源管理を改善するための持続可能性に基づいた行動が必要なのです。特に気候変動による影響は、生態系のプロセスを変え、湖沼と貯水池が持つ生態系として機能すべき能力を脅かし、また、人間の要求に対する基本的なサービスを提供するという機能も脅かすのです。従って、湖沼と貯水池、その流域の保全と管理は、知識、経験、技術を共有し、交換し、その上で、経験



から得た教訓と最適な実践例が政策や行政組織改革に反映され、様々な支援機関によって実施されている個別ないしは計画的な融資活動につながるように強化され、支援されることが必要となるのです。

ワークショップ1日目のオープニングセッションでは、ケニア政府、UNEP、世界銀行の代表による基調講演がありました。基調講演に引き続き、本事業（「湖沼流域管理イニシャティブ」）の対象となっている湖沼についてのケーススタディーについて、2日目、3日目と発表と議論を行ないました。また、3日目にはケーススタディーの発表とあわせて、ナクル湖とナイバシャ湖への現地見学を行ないました。

4日目の最終日は、アフリカにおける湖沼流域管理の鍵として特定された主要課題についての議論に費やされました。すなわち、行政組織、持続可能性、参加、開発関連機関からの資金提供、科学および政治課題についてです。

ワークショップで発表されたケーススタディーと、「湖沼流域管理イニシャティブ」については、本プロジェクト・ウェブサイト<http://www.worldlakes.org/programs.asp?programid=2>をご覧ください。また、電子フォーラムが<http://www.worldlakes.org/programs.asp?programid=5>上に開設されていますので、皆さんふるってご参加下さい。ILECでは、皆さんからのご意見、コメントをお待ちしていますので、一度プロジェクト・

ウェブサイトを訪れてみてはいかがでしょうか？なお、湖沼のケーススタディー、または本プロジェクト全般に関するご意見と質問につきましては、gefmsp@ilec.or.jpにお寄せいただくこともできます。

本ワークショップでのアフリカの湖沼についてのケーススタディーと、昨年6月に開催された、アメリカ、ヨーロッパ、中央アジアの湖沼を対象としたアメリカ・ヨーロッパワークショップ、昨年9月に開催されたアジアの湖沼を対象としたアジアワークショップに基づき、最終報告書が現在取りまとめられています。最終報告書原稿は、今年中頃を目途にプロジェクト・ウェブサイトに掲載される予定です。

湖沼流域管理イニシャティブが最終段階に： ワーキンググループ会議の進捗状況

昨年3月に、湖沼流域管理イニシャティブプロジェクトが正式にスタートして以来、ILECとその共同機関であるレイク・ネットは、昨年12月に終了した、プロジェクトの第一段階のために計画された活動に、専念してきました。中間成果については、プロジェクトのウェブサイト<http://www.worldlakes.org/programs.asp?programid=2>をご覧ください。この中間成果には、●個々の湖沼のケーススタディー、●過去の3回の地域ワークショップで作成された、個々の湖沼の要約、コメント、議論用メモについてのテーマ論文、●現在立ち上がっているeフォーラム上に寄せられた個々の湖沼の要約、及びプロジェクトについてのその他の報告に対する各種コメントが含まれています。現在、第二段階から最終段階に差しかった本プロジェクトにおいては、得られた中間成果を、「総合的な経験と得られた教訓」という報告書に取りまとめるための作業を進めています。

この取りまとめの作業を実施するために、一連のワーキンググループ・ミーティングが開催され、今後もその開催が予定されています。現在までに開催されたミーティングは、昨年12月（準備会議）と今年1月（第1回）に

ILECで、また、2月（第2回）にはワシントンでそれぞれ開催されました。今後も3月、4月、5月にそれぞれ開催が予定されています。

このワーキンググループ・ミーティングは、湖沼とその流域管理に関して鍵となる問題を、整理するための絶好の機会となります。様々な経験を持つ各湖沼の中心人物達と、幅広く、深い議論を直接交わすことによって、こうした鍵となる問題の整理ができるのです。また、ワーキンググループ・ミーティングでは、本プロジェクトの対象となっている28湖沼のケーススタディーからだけではなく、テーマ論文からも経験を引き出すこと、さらに、そうした経験を、主要報告書として取りまとめられる一貫性のある文章に変換すること、にその重点が置かれました。主要報告書取りまとめのために、鍵となるテーマとして認識されたものとしては、●変化に対応するための組織、●適切な対応をするための政策手段、●計画を行動に移すための管理への介入、●教育と参加を通じた一般の人々の関わり、●持続可能な資金調達のための財政メカニズム、●湖沼管理の知識が果たす役割です。第2回のワーキンググループ・ミーティングの参加者に感謝する一方で、プロジェク

ト・マネジャーである中村正久琵琶湖研究所長は、まだまだすべきことが沢山あると述べられました。各章の基本材料が明確になり、それらに対して寄せられた種々の意見は、各章の執筆者が、自分の書いた文章をさらにより良いものとするために修正を加える上で、大変建設的であるとも述べられました。中村氏は、第3回ワーキンググループ・ミーティング前に、不適切と思われる章から章への流れとつながりが見つかるとの可能性があるにもかかわらず、そうした箇所をチェックされました。

最終報告書の準備とは別に、28湖沼のケーススタディーとテーマ論文について、最終版作成のために、現在見直しが行なわれています。ケーススタディーとテーマ論文の原稿は、広く皆さんからご意見をお聞きするために、プロジェクトのウェブサイト（上記参照）で公開され、お寄せいただいたご意見を踏まえて、最終原稿となります。ケーススタディーとテーマ論文は、CDとして編集され、本としても入手可能な最終報告書と共に配られます。

それでは、最終報告書作成に向け、皆様からのご意見をeフォーラム上にてお待ちしております。

湖沼に関するフィリピン初の国際会議が開催される

アデリーナ C.サントス・ボルハ / ラグナ湖開発公社 (フィリピン)

湖沼に関するフィリピン初の国際会議 (フィリピン湖沼会議) が、タガイタイ市にあるフィリピン開発アカデミーにおいて、「湖沼を維持し、命を支えよう！」というテーマの下に、昨年11月25日から28日までの4日間にわたって開催されました。会議には、フィリピン国内から数多くの湖沼関係者が出席しました。会議の目的は、1) 研究開発計画の樹立や政策の展開に与る基礎知識として役立つような湖沼に特有の重要な問題を特定すること 2) 湖沼資源管理上の研究のギャップを特定すること 3) 湖沼資源管理についての国家的な検討項目を作成すること 4) フィリピンの湖沼ネットワーク (プラネット) を組織すること 5) フィリピンの湖沼ビジョンを作成すること の5つでした。

会議の冒頭には、環境・天然資源局のElisea. G. Gozun局長による基調

講演があり、「我々の過度な要求や行為に対して、湖沼がそれに応えられなくなる時が一度にやって来ました。湖沼流域資源の持続可能な開発は、個人、各コミュニティ、各機関のパートナーシップによってのみ成し遂げられるのです。この会議は、そうしたパートナーシップを根付かせる場であるのです。」と述べ、本会議の重要性を強調しました。

海外からの支援表明として、琵琶湖研究所所長であり、ILECの科学委員でもある中村正久博士から、大変時機を得た次のようなメッセージが電話で寄せられました。「我々は、持続可能な開発の必要性に気がついているのですが、これを実行するのは簡単なことではありません。というも、我々は個々の湖沼を、それぞれ独立した湖沼として取り扱ってきました。しかし、我々は、地球上の他の地域の湖

沼にも影響を及ぼしているのだということに、気がつかなければなりません。従って、すべての湖沼は地球上の他の湖沼とつながっているのです。同様な観点から、フィリピンのすべての湖沼もやはり、地球上の他の湖沼とつながっているのです。そして、フィリピンの湖沼ネットワークにかかわる人々はすべて、世界中の湖沼にかかわる人々とつながっているのです。」

この会議では、世界湖沼ビジョン委員会のメンバーの一人であり、ラグナ湖開発公社のアデリーナ C.サントス・ボルハ氏によって世界湖沼ビジョンとラグナ湖湖沼ビジョンが紹介され、その重要性が強調されました。また、すべての人々が、「行動への呼びかけ」に注意を払うよう促しました。レイク・ネット代表のデビッド・リード・バーカー博士は、本会議の目的に対して、個人的に連帯意識の表明を行



ないました。パーカー氏はまた、世界的、国家的、地域的なネットワークが、如何に相互に作用し、その相互の目標を支えるのかについて、見識を披露しました。パーカー氏は、USAIDから相当の財政的支援を受けるに際して、大変重要な人物です。アジア開発銀行から会議に参加した、東南アジア部の上級水資源専門家クリストファー・J・ウェンズリー博士もまた、本会議の主要なスポンサーです。

論文発表、ポスター発表及びワークショップは、「湖沼の科学」、「管理と政策」及び「湖沼管理のためになすべきこと：過去の教訓」の3つのセッションに分けて行なわれました。会議では、22の論文発表と、28のポスター発表がありました。この中で最も興味深かった二つの論文発表は、一つは、パラワン島の北にあるコロン島に住むタグバヌア (Tagbanua) 族のリーダーの一人による発表で、コロン島に固有の、湖沼の保全と管理についての発表でした。もう一つは、フィリピンの湖沼の起源について、よく知られた高名な火山学者である、Raymundo Punongbayan博士の発表でした。

本会議は、環境・天然資源局とそれに関連する機関と部局、すなわちラグナ湖開発公社、森林管理局、生態系研究・開発局、保護地域・野生生物局、国家水資源委員会等の協力によって開催されました。本会議の事務局は、農業分野における大学院研究と調査のためのSEAMEC地域センターが務めました。また、本会議の開催に際し、UNDP、科学技術局、民間企業から資金提供がありました。資金提供をいただきました民間企業は、San Miguel社、Jollibee Food社、Unilever社、Una Research社でした。

4 日間に及んだ本会議は、1) ワークショップのテーマにもとづいて、湖沼管理のために優先されるべき問題と懸念を明らかにし、2) フィリピンの湖沼ビジョンの策定、3) フィリピン湖沼ネットワークの創設とその役員選出、4) フィリピンの湖沼に関する「タガタイ共同宣言」を採択して、成功裡のうちに閉会しました。

フィリピンの湖沼に関する「タガタイ宣言」

湖沼は、さまざまな産物やサービス、審美的、精神的な価値を提供することによって、生の営みを支えているが故に、湖沼の生態系は脆弱であり、そのあるべき姿はそこで営まれる生の質に関係するが故に、経済的、社会的、そして文化的発展は、湖沼資源の賢明な利用と共存しうる方法で追求さるべきであるが故に

フィリピンの湖沼流域のための効果的かつ効率的な管理を促進し実施する上における指針として、「世界湖沼ビジョン」、「統合的水資源管理に関するダブリン原則」、「ラムサール条約」、「ボン条約」、「持続可能な開発に向けたフィリピン戦略 (フィリピン・アジェンダ21)」、「フィリピンにおける生物多様性に関する国家戦略と行動計画」およびその他関連する国際的、国家的対応策の原則を認識し、環境に気配りをした責任ある開発の必要性が、生命を支える生態系としての湖沼流域における人口の増加とそれに付随する諸々の圧力の下では、重要かつ緊急であるということを中心に留め、湖沼流域のあるべき姿を維持する一方で、湖沼資源の利用に当たり、人々の主権、特に部外者たる人々の主権に留意し、絶えることなき参加が保証された湖沼流域の管理と保護のための幅広い有識者間の強力なパートナーシップ構築の必要性を認識し、管理戦略と政策形成のためには、湖沼流域についてのデータと情報の体系的な収集、保存、改変、整理の重要性を確信し、フィリピンの人々の生活の質の向上に向け、上記の国際的、国家的な宣言に関する原則と行動への呼びかけに対し、ここに集う私たちが支援と関与を行うことを確約し、それ故私たちは、最善を尽くす意志をもって、社会的、経済的、文化的な発展活動を計画し実施していく上で、環境への関わりを確実に集合させるために、様々な部門と協働することを約し、フィリピンの湖沼流域の適切な管理に関する在来の知恵を引き出すために、地域の人々に専門的知識を分かち与え、湖沼生態系、生の営みについての質、資源ならびにそれに関連する諸々の事象を、保護し、再生回復し、管理し、あるいは高めるために特に組み立てられた政策、計画および事業を考慮し、支持し、フィリピンの湖沼についての共通のビジョンを練り上げ、それを推進し、平和で自由かつ公平正大な雰囲気の下で、フィリピンの湖沼周辺環境の、真摯で持続可能な開発を擁護し、第1回フィリピン湖沼会議 (湖沼会議2003) の目的を遂行するための系統立った行動に立ち上がるものとする。

すなわち、a) 研究開発計画と政策の擁護のための入力情報として役立つ、湖沼に特有な主要課題を特定すること b) 湖沼資源管理における研究のギャップを特定すること c) 湖沼資源管理についての国家的な課題を具体化することとなるフィリピン湖沼ビジョンを策定すること。

したがって、私たち湖沼会議2003への参加者は、我々の湖沼を救うためのたゆまぬ努力を確実にすべく結束力を生み出すために、フィリピン湖沼ネットワークに自発的に参加することを、ここに宣言し、全ての参加者が署名するものである。

2003年11月28日

シャンプレーン湖流域プログラム：行動に向けた機会

William. G. Howland (シャンプレーン湖流域プログラムマネジャー)

Roland (Buzz) Hoerr (バーモント市民助言委員会議長)

シャンプレーン湖流域は北米において、自然と文化に富み、数多くのレクリエーションが楽しめます。シャンプレーン湖流域の西側は、ニューヨーク州のAdirondack地方に接しており、東側には、バーモント州の緑濃い山々が広がっています。また、流域の北側には、ケベック州(カナダ)の肥沃な平野が広がっています。シャンプレーン湖流域には、古くから多くの人々が住んでいますが、それは流域の自然特性と大いに関係しているのです。シャンプレーン湖の流域は、すでにお話したように、米国内の他の州に加えて、隣国のカナダ国境にまで広がっているため、過去何十年にもわたって、国際的な協力の必要性が叫ばれていました。

シャンプレーン湖流域プログラムは、ニューヨーク州、バーモント州、ケベック州、米国環境保護庁、関連するその他の連邦政府及び州政府の部局、並びに市民とのパートナーシップなのです。本プログラムは、連邦議会からの出資により、1990年に設立されました。本プログラムの目的は、「行動に向けた機会：未来のシャンプレーン湖流域のための参加計画」と名付けられた、シャンプレーン湖管理計画の実施について、各機関との調整を行なうことです。本プログラムの目標は、シャンプレーン湖流域の環境を保全し、よりよい環境を創出すると同時に、その流域から得られる社会的、経済的便益を守り、さらなる便益を得るため

に、共同して取り組むことなのです。シャンプレーン湖は、概して大変きれいな湖にもかかわらず、いくつかの湾や湖岸近傍では、汚染がかなり進行しています。

重点地域の問題解決に取り組むため、「行動に向けた機会」と名付けられた、シャンプレーン湖管理計画の中で述べられている4つの最優先事項は、以下のとおりです。

- 流入河川でのリン負荷を低減すること
シャンプレーン湖の一部では、リンの濃度が大変高いために、藻の異常繁殖や、その他の問題を引き起こしています。その結果、水質が悪化し、異臭が発生しています。こうした問題は、シャンプレーン湖の水利用や、レクリエーション利用にとって、最大の問題と考えられています。

- シャンプレーン湖に流入する毒性汚染物質を低減すること

シャンプレーン湖を汚染している有毒物質の濃度は、工業地域にある他の湖と比較すると、低いのですが、毒物汚染を懸念する明確な理由があります。魚類の体内から、高濃度のPCBが検出されたため、ニューヨーク州とバーモント州両政府は、PCBを含む毒性物質が体内に蓄積されることによる人の健康への影響を恐れて、魚類の消費を制限するよう指導したのです。

- 水域への厄介者の外来種を効果的に管理すること

厄介者の外来種は、シャンプレーン

湖の魚類資源と、野生生物資源に重大な影響を与えています。寄生型海ヤツメウナギ、ヒシ植物、ユーラシア原産キンギョモとゼブラ貝の湖への侵入は、生態系に深刻な影響を及ぼし、湖のレクリエーション利用も、危うい状況になっています。

- 人の健康を守ること

細菌性の病原菌と寄生菌を含む、湖の浅い部分での水質悪化によって、シャンプレーン湖で取れた魚を食べた場合には、病気を引き起こす可能性があるのです。さらにこうした病原菌によって、晩夏には時折ビーチが閉鎖されるのです。病原菌の発生源として、農業排水、不適正な水処理、合流管や汚水管からの溢水、都市からの雨水流出があげられます。

シャンプレーン湖管理計画における、4つの最優先事項以外の優先事項としては、魚類と野生生物の管理、湿地、河川中及び河岸の生物生息地の管理、文化遺産とレクリエーション資源の管理です。

シャンプレーン湖管理計画の実施

多くの関係者によるパートナーシップによって、シャンプレーン湖管理計画は実施されています。シャンプレーン湖流域プログラムの運営委員会には、地域、州、連邦政府の関連部局の幹部職員、各市民助言委員会の議長の他、3つの特別助言委員会、すなわち、教育・福祉、技術、レクリエーション・文化遺産委員会の各議長により、構成されています。重要なプログラムの資金は、連邦政府より支出されており、毎年その金額は、数百万ドルに上りますが、これ以外にも州からの支出や、連邦政府以外からの補助金によって、プログラム資金は補強されています。管理計画の実施に際しては、以下に示すように、いくつかの重点行動分野があります。

- 湖の13地点と18の主要流入河川において、浄化活動の過程とその必要性を監視する

- 管理方針に対する、重要な情報のギャップを埋めるための研究プログラム



- 地方政府やNGOが、それぞれ独自に汚染防止活動に取り組むための提案型助成金プログラム
- 技術的な事業、文化遺産事業、教育的プロジェクトについて、流域にわたって指導助言スタッフが調整する
- 汚染を低減するための方法について、一般の理解を助けるためのウェブサイトを整備、出版物やメディア物の発行、カリキュラムの開発

関係者の参加による管理計画の実施

ニューヨーク州、バーモント州、ケベック州の市民アドバイザー委員会では、その政策決定に際して、広く一般からの参加を認めています。一般からの関係者の参加は、シャンプレーン湖

流域プログラムの管理において、重要な役割を果たしています。市民助言委員会は、最初の管理計画である「行動に向けた機会」が策定されて以来、流域内外において、数多くの公開の会議を主催しました。この管理計画が実施されている現在、市民助言委員会では、シャンプレーン湖流域プログラムの年度予算策定に際して、関係者の参加を要請しており、管理計画と予算の優先事項に関して、定期的に助言を求めています。

技術助言委員会もまた、コミュニティ参加者の意見を反映しており、管理に関する諸問題について、科学的に健全な手法を勧めることを通じて、運

営委員会への情報提供において、重要な役割を果たしています。

シャンプレーン湖の資源を管理するために、多彩な関係者が力を合せて働いています。シャンプレーン湖やその支川の健全性に関心を寄せる市民グループは、湖沼管理と生活の質、ビジネスチャンス、(文化的)遺産、(自然環境の)美しさとの関連を理解しています。というのは、関係者は、しばしば助言委員会を通じてシャンプレーン湖流域プログラムの計画段階から関わっているため、策定された管理方針は自分達が作ったものであると感じており、シャンプレーン湖の改善のために、喜んで働くとするのです。

故ウィリアムズ博士の遺稿「宇宙船地球号」



ILEC科学委員会副委員長を長年務め、2002年1月26日に亡くなられた、オーストラリア・アデレード大学動物学部名誉教授であった、故ビル・ウィリアムズ氏が、亡くなる直前に書かれたエッセイ「宇宙船地球号」の原稿を、ILEC科学委員の一人である、松井三郎京都大学教授よりいただきました。スペースの都合上、ニュースレターでは、その一部(「序文」)しかご紹介できませんが、ILECのホームページ(<http://www.ilec.or.jp/>)にはその全文を掲載しておりますので、是非ご覧下さい。

宇宙船地球号

W.D. Williams AO, D Sc, PhD / アデレード大学 動物学名誉教授
(2002年1月26日 死去)

はじめに

アメリカ合衆国とロシアは、宇宙船の建造に関して多くの知識と経験を有している。結局、彼らは過去何十年にもわたって、宇宙船を建造しているのである。彼らは、人類にとっての宇宙船の内部環境が、ある一定の許容限界内になければならないことを知っているのである。宇宙船内の空気は、適度なガスの混合状態に保たれていなければならない。宇宙船は、宇宙飛行士の排泄物を処理するため、効率的な配水システムを備えている必要があると同時に、飲料水と洗顔用の水を供給する必要があることも、彼らは知っている。また、搭乗している宇宙飛行士に、食

事を与えなければならず、それも十分な量の、栄養バランスの取れた食事を与えなければならないことも、彼らは知っている。実際、宇宙船に関する最も重要な知識は、宇宙飛行士全員のニーズと要求は、宇宙船に搭乗している宇宙飛行士の数次第なのである。宇宙船を最初に建造した者にとっての最優先事項は、多分、宇宙船を混雑状態にしないことだったのであろう。

自立型の宇宙船、別の言葉で言えば、地球からの補給を必要としない宇宙船の建造には、その建造について、相当な経験を有するアメリカ合衆国とロシアのどちらの国も、そうした宇宙船を建造することができないのである。環

境科学者の最大限の努力にもかかわらず、アリゾナの砂漠で建造された自立型宇宙船でさえも、恐らく持続可能ではないことが、最終的に証明されるのである。事実、我々が知る唯一持続可能な宇宙船は、惑星地球なのである。地球の存在は、宇宙では大変珍しい存在のように見える。少なくとも、高度な文明を持つ地球外生命体が存在するという証拠は、現在までのところ見つかっていない。(多大な努力が続けられているにもかかわらず)こうした事実は、1000年も経てば自己破壊してしまうような、いかなる高度な文明であっても、宇宙の時間から考えれば、ほんの一瞬にしか過ぎないことを示唆している。

新顔紹介

本年1月13日より、ILECに新たに加わった西尾好未さんをご紹介します。以下は、ご本人による自己紹介です。

初めまして。本年1月から、支援研修課で主にJICAの研修事業を担当して

います、西尾好未です。学生時代は滋賀県立大学大学院に在籍し、第9回世界湖沼会議では、湖沼会議初の学生湖沼会議を主催し、18カ国の参加学生とともに学生宣言を提出しました。

卒業後は、第3回世界水フォーラム滋賀県委員会事務局で1年間勤務し、その後民間の環境コンサルタント会社

に就職しました。

そして、どうしても湖沼保全に係ることが出来る仕事がしたいと考えていた私にとってこの度のILECへの採用は、大変光栄な出来事です。気持ちばかりで、経験も知識もまだまだ不十分ですが、一生懸命行っていきたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

第14回湖沼水質保全コース研修始まる

JICAの集団研修コースのひとつである「第14回湖沼水質保全コース」が、3月19日までの2ヶ月の日程で、1月18日からILECでスタートしました。今回の研修生は10名（男性6名、女性4名）で、アルゼンチン、エジプト、ベナン、ブラジル、中国、ハンガリー、メキシコ、スリランカ、シリアからの参加です。

このコースでは、総合的な湖沼水質管理技術と知識の習得を目的としており、ILECでの講義に加えて、水質分析や分析機器などの実習、工場見学、浄水場や下水場などの施設見学、東京と広島での講義と見学、草津市国際交流協会（KIFA）さんのご協力による、新春パーティーやホームステイなどもあります。



昨年に比べれば、今年の冬はそれ程の寒さではありませんが、無事に研修を終え、帰国後は、研修で学んだ知識

を生かして、それぞれの国の湖沼水質保全のために、活躍してほしいと思います。

第58回理事会及び第51回評議員会報告

第58回理事会及び第51回評議員会が、3月4日の午後2時から3時までと、午後3時から4時まで、それぞれILECで開催されました。今回、理事会と評議員会が同時開催されました。理事会と評議員会では、平成15年度補正予算、平成16年度事業計画及び収支

予算の議案が審議されました。熱心な議論が行なわれ、すべての議案について、事務局原案どおり可決、承認（評議員会は同意）されました。



世界湖沼ビジョン・エグゼクティブサマリー ハンガリー語版が完成

これまでに、スペイン語、ドイツ語が完成した世界湖沼ビジョン・エグゼクティブサマリーですが、このほどハンガリー語版が完成しました。今後も、

世界湖沼ビジョンの一層の普及を目指し、さらに多くの言語に翻訳できるよう、引き続き努力します。尚、エグゼクティブサマリーにつきましては、ILEC

のホームページでご覧いただけます。

ILECのホームページ
<http://www.ilec.or.jp/>

今後の予定

- 国際水需要管理会議（6/30～7/3：アンマン、ヨルダン）
- 世界水週間（8/16～8/20：ストックホルム、スウェーデン）
- 低水質水の灌漑利用に関する国際ワークショップ（9/9～9/10：モスクワ、ロシア）
- 生態水理学に関する第5回国際シンポジウム（9/12～9/17：マドリード、スペイン）
- 水の汚染規制のための湿地に関する第9回国際会議（9/27～9/30：アヴィニョン：フランス）



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE

- 事務局 -

〒520-2264 滋賀県草津市下物町 1091 (財)国際湖沼環境委員会
TEL. 077-568-4567 / FAX. 077-568-4568 E-mail : info@ilec.or.jp